**兼六園**

兼六園は、金沢城に隣接する、壮大な廻遊式庭園である。多様な要素が融合し構成された庭ということから、日本で最も有名な庭園の一つとなった。

兼六園は、「6要素から成る庭園」という意味を持つ。古い中国の文書にしたがい、理想的な庭園の6つの要素を満たしているため、この名が付いた。通常は、この６つの要素を満たすのは難しいと言われている。そして、この6つの要素は、３つの組み合わせに分けられる：宏大と幽邃、人力と蒼古、水泉と眺望、である。

兼六園の表情は、季節によって劇的に変わる。春には、金沢城に面する門から歩道にかけて、桜が淡い色の天蓋をつくる。夏には、山崎山にある御亭の下に広がる林に、緑の苔のじゅうたんが生い茂る。秋には、庭園の南東にある楓と欅が、金色、深紅、赤褐色に一気に変わる。そして冬になると、庭師たちは、竹と縄を木に結びつけ支える「雪吊」で、この地域の豪雪から、慎重に造った木の形を守るのだ。

庭園にはいくつかの歴史的な茶室があり、江戸時代（1603-1867）の金沢における、茶道の重要性を語る遺産である。その中には、兼六園に一番古くから残る建造物である、1774年に建立された夕顔亭が含まれる。時雨亭は、より近年の建造物で、当初、庭園にあったものと同じ様式で2000年に建立された。訪問者は、茶と伝統菓子とともに、ここで寛ぐことができる。

現在の石川県を含む加賀藩を統治していた前田家は、金沢城の外側の庭として、17世紀に兼六園の前身となる庭園を造った。当初の庭園は大分小さく、蓮池門周辺の区域ほどの広さしかなかった。1800年代半ばにかけて、前田家の子孫がこの庭園を開発し拡張した。この庭園は、1874年に「兼六園」として一般公開された。